

「説明する」という言語活動に関する学習指導の工夫

— 小学校第4学年の国語科を中核とした指導法の開発 —

所属校：調布市立北ノ台小学校
氏名：岩本里美
派遣先：玉川大学教職大学院

キーワード：言語活動の充実・説明する力・論理的思考と表現・関連的な指導

I 研究の目的

1 主題設定の理由

情報化、国際化などによる価値観の多様化が進む今日、意思の疎通や共通理解を図るために言語の役割が重視されている。それに伴い、平成20年3月に告示された小学校学習指導要領では「言語活動の充実」が明記され、指導法の開発が求められている。

言語活動は多様であるが、相手に納得が得られるような説明が不得手という児童の実態や、説明がいろいろな教科で頻繁に行われているという実態から、「説明する」という言語活動を取り上げ、指導法を開発することとした。対象として第4学年を選んだのは、低・高学年のモデルとして適切であると判断したからである。

2 研究の目的

「説明する」という言語活動の充実を図る上で必要な言語力（以下「説明する力」）を育成するための指導法を開発することとした。その際、新学習指導要領で明記された「思考・判断・表現を一体化した指導」「国語科を中核としつつ他教科等との関連を図った指導」及び「習得と活用を推進する指導」を目指し、仮説を次のように立て検証することとした。

仮説

- ①論理的思考と表現の型やモデルを提示することで、説明するために必要な思考と表現の仕方の習得を図り、さまざまな題材の説明に活用することができる。
- ②他者との対話を取り入れながら「説明する」「自己批評する」を繰り返すことで、「説明する力」の向上を図ることができる。

II 研究の方法

1 文献研究

- (1) 文献や先行研究による重要語句の定義
- (2) 『「説明する力」の一覧』の作成

2 調査研究

- (1) 「説明する」という言語活動の指導に関する教員の意識調査による課題の明確化

- (2) 「説明する」という言語活動の学習に関する児童の意識調査による課題の明確化

3 授業研究

- (1) 「説明する」という言語活動の指導法の開発
- (2) 検証授業の実施及び観察対象児童の記録と分析
 - A児：目標を十分に到達することが予想される
 - B児：目標を到達することが予想される
 - C児：目標の到達に努力を要することが予想される
- (3) 検証授業後の児童の意識の変容の分析

III 研究の結果

1 本研究における言葉の定義

言語活動とは

児童の思考力・判断力・表現力を育むための話すこと、聞くこと、読むこと、書くことの活動

「説明する」とは

聞き手が話される事柄について知らず（知っているてもその一部であるか不確かなもの）、必要感をもっていることを前提とし、事柄の内容や意味などを聞き手に分かるように説き明かすことで、話し手が聞き手に対して特定の理解・反応を期待する行為

2 「説明する力の一覧」の作成

各教科等における「説明する」という言語活動を行うために必要な言語力を＜受信・分析＞＜まとめ＞＜発信＞＜相互発信＞の観点で体系的に整理した。

3 「説明する」という言語活動の課題

(1) 児童の学習上の課題

東京都公立小学校3校の第4学年の児童329名を対象に意識調査を実施し、明確化した課題は次の5点である。（平成22年6月実施）

- ①説明が「とても得意」「得意」と答えた児童の合計は48.9%で「説明する」ことをあまり得意としていない。
- ②「体験」や「事実」の説明は積極的だが、「手順・方法」や「根拠に基づいた自分の考え」の説明は消極的である。

③教員の指導場面が多いにも関わらず、児童は算数の解法の説明を不得手としている。国語科で「手順・方法を説明する力」の習得を図り、算数科で活用させるという関連的指導が必要である。

④児童が説明に困る原因として挙げている項目は、教員が育成を急務としている「説明する力」と重なっている。

ア 説明する内容を理解する力

イ 自分の考えを裏付ける根拠を見付ける力

ウ 説明の順序や組み立てを考える力

エ 説明の中心を明確にする力

オ 聞き手の様子を見て声量や速さを調節する力

⑤説明に困ったときどのように説明し直せばよいか分からない児童が約半数近くいる。

(2) 教員の指導上の課題

東京都公立小学校の8校で第3・4学年の担任を経験した教員105名を対象に意識調査を実施し、明確化した課題は次の4点である。(平成22年6月実施)

①「説明する」という言語活動が一番多い教科は算数科であり、言語力育成の中核となるべき国語科は二番目に位置している。

②国語・社会・算数・理科(以下4教科)の「説明する」という言語活動の目的は「学び合い」であり「説明する力」の育成を十分に図っているとは言えない。

③国語科では「体験」の説明、社会科では「事実」の説明、算数科では「手段・方法」の説明、理科では「自分の考え」の説明場面が多い。国語科では児童の得意な「体験」よりむしろ苦手な「手順・方法」や「自分の考え」を説明する指導法の開発が必要である。

④教員が説明の指導を避ける理由の第一位は、児童の「説明する力」の個人差が大きいことである。

4 「説明する」という言語活動の指導法の開発

(1) 他教科との関連をもたせ、得意と苦手を組み合わせて、習得から活用を図る単元の開発

検証授業ⅡとⅢの例

コンビニエンスストアの工夫の説明

(社会科との関連)

得意な「事実」と苦手な「考え」を組み合わせ「根拠や事例を挙げて説明する力」の習得を図り(検証授業Ⅱ)、自由な題材で活用させ(検証授業Ⅲ)、総合的な学習の時間の探究的な学習へ発展させる。

(2) 「説明する力」の習得を図る指導過程の構築

説明に必要な論理的思考と表現の型やモデルの提示→「説明する力」の習得状況の把握→習得している児童の紹介→つまりしている児童の説明に合わせた個別指導→習得状況の確認

(3) 「説明する力」の個人差に応じた指導法

① 自己の「説明する力」に合わせた題材や内容の選択

② 習熟度に配慮したペアやグループ編成による交流と自己批評の活性化

(4) 説明の内容理解を図り「説明し直す力」を育成する指導法

① 国語辞典等で調べる習慣の育成

② 予想される質問と答えの準備

③ 繰り返すか、違う言葉で言い換えて説明し直す方法の提示と繰り返し学習

IV 考察

1 児童の意識の変容

検証授業を行った第4学年の学級の児童を対象に、6月と同じ意識調査を検証授業後に実施した。その結果、以下の成果が見られた。(平成22年10月実施)

(1) 成功体験を基に、説明全般に対して自信と積極性をもった児童の増加

(2) 「説明に困る原因」の全項目の減少

(3) 説明に困ったとき「説明し直す」児童の増加

2 観察対象児童の活用状況

検証授業後、3名の観察対象児童が国語科の授業で習得した「説明する力」を他教科等でどのように活用しているのか観察した。その結果、手立てなしで活用できたA児B児と、国語科での学習を想起させることで活用できたC児の姿を見ることができた。

3 仮説の検証

①論理的思考や表現の型やモデルを提示するだけでなく、その後の習得状況を把握し、「習得している児童の思考と表現の紹介」及び「個別指導」により、全ての児童に説明するために必要な思考や表現の仕方の習得を図り、さまざまな題材の説明に活用することができた。

②対話の活性化を図るペアやグループを編成し、他者との対話を取り入れながら「説明する」「自己批評する」を繰り返すことで「説明する力」の向上を図ることができた。

4 今後の課題

主な課題は、国語科と他教科等との関連的な指導法をさらに開発することである。